

関西生コン支部武委員長解任問題についての見解

木下武男

武建一委員長が突然、解任させられました。関生弾圧反対を闘っている者たちには大きな事件でした。指導者の交代は労働運動ではありふれたことですが、注視すべきは、権力から弾圧されている当の労働組合で、その指導者が異常な事態で解任させられたことです。

●役員交代のルールとマナー

異常な交代劇はつぎのような大会の場面が如実にあらわしています。10月10日に支部大会が開かれ、委員長の挨拶が始まりました。しばらくすると発言が制止され、マイクのスイッチが切られました。そして、委員長は3、4人の者に取り囲まれ、会場から追い出されたのです。現役委員長が大会会場から実力をもって放逐されたのです。円満な世代交代ではなかったことは明らかでしょう。

もちろん、労働組合で執行部の交代をめぐる対立が生じるのはよくあることです。その場合にも執行部側も批判側も組合規約にそって混乱が起きないようにしなければなりません。批判力は集団を形成して、正々堂々と指導部を批判すればよいのです。その批判が正しければ、多数の組合員の支持を得て、執行部に罷免・交代を要求することができるでしょう。もし拒まれたら、組合規約に沿って大会で多数をもって罷免すればよいのです。

しかし、今回の委員長の解任はこのような経過を踏んでいないのです。それは、やましいことがあったからだと思わざるをえません。今回の解任問題については外部の私にでも、異常と思われる点が多々あります。組織内の問題に立ち入らなくても、つぎの三点について強い疑念をもっています。

●世代交代ではなく委員長の排除

第一は、委員長解任は世代交代だと説明されていますが、本当は武委員長の追い落としではないかという点です。そもそも執行部の世代交代は、武委員長を含めた組合内では了解事項でした。組合外の者でも次期の委員長は誰々らしいとの情報もとどいていたくらいです。したがって、交代する側と降りる側との、交代時期や引継ぎなどの話し合いがなされていくと思われていました。

武委員長の長期拘留のため、話し合いもできませんでしたが、2020年5月28日に保釈となりました。ところが、昨年10月16日の関生支部の大会が終わった後、突然、委員長は執行部から排除されたのです。

執行部の「決意書」が武委員長に突きつけられました。「決意書」は執行委員が署名・捺印するというものでした。その「決意書」は、「今後の組織運営については、委員長を除く常任をはじめ執行部での集団指導体制での運営を行います」という、まさしく委員長排除を目的にしたものです。

それほど排除したかったのならば、躊躇することなく、堂々と大会で次期執行委員長から外せばよかったのです。ところが再任されました。つまり最高議決機関である大会で正式に選出・任命されたにもかかわらず、執行委員の「決意書」なるもので組合の「運営」

から除外されたのです。武委員長は、この件は口外しないとの約束を一年間守りました。

この経過をみると、世代交代論は、委員長排除の本質を隠すものであることが明らかになります。今回の事態を世代交代や勇退といった言葉で説明するむきもありますが、それは欺瞞であり、武委員長の排除を目的とした事件なのです。

●武委員長の功労

第二は解任があったとしても武委員長にはそれなりの処遇があつてしかるべきだったのではないかということです。関西生コン支部の歴史は産業別労働組合についての実践的な教科書もなく、ただただ「ひとの痛みは我が痛み」との信念にもとづいて切り開いてきたものです。私の『労働組合とは何か』（岩波新書、2021年）で詳しく述べたように、まさしく血と汗と涙の歴史のなかで今日の到達点があります。

その歴史の始まりである1965年の支部結成以来、最前線で指導してきた者に対して、一片のリスペクトもないのでしょうか。武委員長は解任された後、無役です。一組合員でしかありません。普通、労働組合では功労のあった委員長などには「顧問」や「名誉」がついた役職が与えられます。功労に報い、また助言を得る機会をもうけるためです。

●反弹圧運動の高揚での利敵行為

第三は、反弹圧闘争の高揚のさなかの解任は利敵行為ではないかということです。戦後労働運動は決定的な衰退の局面にあります。それは企業別組合と資本による労働者の統合の結果ですが、根本は、労働運動側が産業別組合の創造という対抗的戦略を打ち出し得ていなかったからです。関西支部への弾圧は産業別組合であるがためですが、同時に重要なのは、弾圧を通じて関西支部への大きな注目と、産業別組合への関心が高まっていることです。ここに労働運動再生の現局面の焦点があります。

すでに関西支援の動きは広がっています。支援する会も、大阪・滋賀はもちろん、兵庫、東海、静岡、神奈川、東京、北海道にできています。そのなかで、世代交代の是非を超えて、反弹圧運動の象徴的な存在になっているのが武建一なのです。武委員長のドキュメンタリー映画「棘1」「棘2」が、幅広い呼びかけ人と多くの市民の参加によって各地で上映されていることから明らかでしょう。

関西型ユニオンと武建一は、関西生コン支部だけが抱え込む固有の財産ではなくなっているのです。獄中で1年9ヶ月闘い抜いた武建一は反弹圧運動の象徴であり、労働運動再生のシンボリックな存在になりつつあったのです。

だから、世代交代は当然だとしても、裁判闘争や運動の高揚を考えれば、何故今なのかとの疑問を禁じ得ません。あといくらかの期間、委員長の職をつづけもよかったのではないのでしょうか。そして円満な交代をはかる。そうではない今回の解任は、あまりにも短慮と言うほかありません。

私は労働運動の研究者として以前から関西生コン支部の運動を注目し、研究してきたつもりです。その立場からみれば、世代交代の名の下に武建一を関西運動から追放する行為は、労働運動の歴史に大きな汚点を残すことになるに違いありません。反弹圧の運動は新しい執行部とともに進むことになりますが、これらの疑念が消えることはないでしょう。多くの方々が、今回の事態に注目されるよう切にお願い申し上げます